

台湾国内では冷泉と海産物で有名な、宜蘭県中部の海岸沿いにある蘇澳鎮の、中心部からやや離れたところに鎮公所(鎮役所)がある。一般住民は、勝手続きのためにしばしばここを訪れる。この2階に、石垣市と蘇澳鎮との姉妹都市交流の足跡を記念した常設展示があることは、あまり知られていない。

そもそも交流は、民間レベルで八重山青年会議所と蘇澳鎮青年商會とが、82(昭和57、民国71)年に姉妹締結したことに始まる。その後、交流を続けて95年に石垣市と蘇澳鎮が姉妹都市となった。



行われていた。また、八重山の人々は終戦時に蘇澳港から引き揚げる際、地元住民の手助けを受けたという。展示室内には、鎮内の白米(バイミー)地区特産のけたをモチーフとした民芸品、砲台山遺跡の清代鑄造大砲といった歴史資料が展示されている。

子頭などのような、八重山地方の独自の民芸品、歴史関連の書籍、交流の足跡を示したポスターなどが展示されている。

蘇澳鎮公所の八重山民俗資料展示

角南 聡一郎 (財団法人元興寺文化財研究所・主任研究員)

このような姉妹都市締結の背景には、交流の歴史が前提となっており。そして、双方の地域的特色を不揃いとして、民俗や民俗

都市提携10周年を記念して石垣市役所ロビーで、石垣市と蘇澳鎮の交流の歴史を紹介する交流のあゆみ展が実施された。

日本との関連で特に興味深いのは白米木履館(もくげいかん)などで、製作販売されている台湾式のげたである。

戦後、いったんげた産業は途絶えたが、近年、地元住民により観光資源として復活を果たした。白米地区は、たゞ地域振興を試みているのである。館内には大小さまざまな履物が製作・展示販売されており、履物の製作実演も見学することができ

る。履物は台湾式だけでなく日本式のげたも含まれている。つまり、台湾の民俗資料・伝統文化の中には、日本時代の記憶や技術も含まれているのである。

台湾の豊や日本式黒瓦の伝統は、日本植民地時代にも日本からもたらされた技術・建築部材である。日本人にとって、豊や黒瓦は日本独自の伝統文化を表象するものであるという考えが一般的である。ところが、かつて日本の植民地であった台湾や韓国にも日本式の生活習慣や文化は影響を残した。

他方、石垣島の旧盆の期間中に行われる行事、アンガマに用いられるウシユマイとミン

資料として歴史資料は必須であると考えられているようだ。

この地は日本人によって石灰岩採掘工業が開始され、これをもととしたコンクリートと炭酸カルシウムの産地として知られていた。

一方、地元山林資源である鶴掌樹(がしよ)が、俗称・江菓樹(こうぼつじゅ)を利

用したげた生産が行われる。逆に05年には姉妹

地方、石垣市にも蘇澳鎮の歴史や民俗を紹介する展示空間が設けられると、石垣市民にも蘇澳がより身近な存在となるのではないだろうか。

面都市は、古来頻繁に双方の漁民の往来が

のアンガマ面II写真

地では旧盆明けに行われる邪気を払い、無病息災、繁栄を願う伝統行事、イタシキバラ(獅子祭)に用いられる獅子



地方、石垣市にも蘇澳鎮の歴史や民俗を紹介する展示空間が設けられると、石垣市民にも蘇澳がより身近な存在となるのではないだろうか。